



共生の時代

'11
5月

●発行:グリーンコープ共同理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号 カーニープレイス博多4階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



プロフィール
宮崎県生まれ。福岡市在住。夫、長男(26)・二男(24)の4人家族。介護福祉士。グリーンコープ生協ふくおか組合員

在宅福祉ワーカーズ・コレクティブ
くるみ代表

今井 行子^{ゆき こ}さん

「子ども時代は厳格な父の元で育ち、目立たず、自分の言いたいことも無意識に押さえておく性格でした」と今井さん。共働きで、幼い頃から家の手伝いは当たり前。高校から寄宿舎生活だったこともあり自然と自立心が養われていった。結婚後、生まれてきた子どもたちがアトピー性皮膚炎だったことから「食」への関心が高まる。また、成長に伴って子どもたちが「周りの目を気にし、精神的にストレスを抱えるのではないだろうか」

と懸念した。できるだけ子どもと周りの環境に関わろうと、小学校の入学と同時にPTA活動に参加した。いろいろな人と関わる中で、自分の考えをしっかりと持ち、伝える大切さを実感。活動の中の人権学習で「自分」も「他の人」も大切にすることを改めて考え直す機会を得た。二男が卒業するまでPTA役員を9年間務めた。

1995年、PTAの役員を務める傍ら、家事サービスワーカーズくるみ(以下、くるみ)の設立に関わった。「生まれ育った宮崎では、日常的に近所の人たちと関わりあい、助けあうことがごく自然なこと。改めて助けあうのではなく、当り前のことをするのだとワーカーズを自然に受け入れました」。グリーンコープの福祉に対する考えに共鳴した。当時は仕事の段取りなどすべてが手探り状態。マニュアルも打ちあわせもないまま、訪問先の住所が書かれたメモを頼りに利用者の元へ飛び込

2 2010年、在宅福祉ワーカーズ・コレクティブ福岡連絡会は、抱機館福岡の設立にいち早く「私たちにできることはないか」と寄付を考え、1000万円分の厨房機材等を届けた。当時代表だった今井さんは「私たち福祉ワーカーズが厳しい経営状況からここまで大きくなり、こうして誰かの役に立つ存在にまでなれたことはこの上ない喜びです」と感慨を覚える。

「子ども時代は厳格な父の元で育ち、目立たず、自分の言いたいことも無意識に押さえておく性格でした」と今井さん。共働きで、幼い頃から家の手伝いは当たり前。高校から寄宿舎生活だったこともあり自然と自立心が養われていった。結婚後、生まれてきた子どもたちがアトピー性皮膚炎だったことから「食」への関心が高まる。また、成長に伴って子どもたちが「周りの目を気にし、精神的にストレスを抱えるのではないだろうか」

「PTAの経験も、くるみの経験も、今の自分の財産です。たくさん周りの人たちに助けられ、勉強させてもらい、恵まれた環境で成長させてもらえた」と語る今井さん。今後は世代交代を意識しながら、見守り役として関わっていくつもりだ。

※1 2011年2月より在宅福祉ワーカーズ・コレクティブ福岡連絡会に改称
※2 ホームレス者及び生活困窮者のための自立支援施設

助けあいはごく自然なこと

グリーンコープは、
東日本大震災の被災地に
毎日救援物資を届けています



震災から2ヵ月、グリーンコープは今後も救援物資を届け、被災者に必要な支援を続けていきます

Contents

リデュース・リユース優先の循環型社会をめざして 2

うちのメーカー・うちの生産者[㊦]
南高有機農法研究会 バレイショ・玉ねぎ 3

ファイバーリサイクル事業 パキスタン視察報告
私たちが届けた古着はパキスタンの子どもたちの教育に生かされます 4・5

お米と野菜を食べよう! -2-
お米と野菜の利用普及の取り組みや、組合員・職員と生産者との交流がすすんでいます 6

南と北をつなぐ食べもの エコシュリンプ 7

2010年に宮崎で発生した口蹄疫は、私たちにとっても辛い出来事だった。産直豚の生産者「綾豚会」の皆さんのことを思うと心が痛かった。生産者の皆さんに会った時の前向きな姿に私のほうが元気づけられた。口蹄疫の時に強く感じたのは、地域でのたすけあいと絆。
今年に入り、1月に噴火した新燃岳、3月に発生した東日本大震災、放射能汚



染の恐怖……。目に見えないウイルスの発生や自然災害が次から次に起き、地球が悲鳴を上げ、私たち人間に何かを言っているような気がしてならない。でも、どんなに大変な時でも、人々との繋がりが途切れることはないと思う。組合員活動の中でできた「絆」を大切に、次のステージでも活動していこうと思う。
グリーンコープ生協みやぎ理事長
杉尾紀美子



検討会議は衆議院議員会館で開かれ、多くの参加者から発言があった



共同体組織委員長大橋由美子さん(左から3人目)とグリーンコープ生協ふくおか理事長田原さん(左から2人目)は、請願の紹介議員となることを受託してくれた福岡県の国会議員を訪れ、署名を届けた



グリーンコープ生協おいた理事長奥田さん(中央)とグリーンコープ生協くまもと組織・環境委員長生田裕美さん(右)も、大分県の紹介議員に署名を届け採択の実現をお願いした

グリーンコープの4 R 運動

グリーンコープは、食べものを守ることは環境を守ることでもあると、環境問題に積極的に取り組んできた。リフューズ（断る）・リデュース（減量する）・リユース（再使用する）・リサイクル（再生利用する）の4 R 運動もその一つ。

4 R の取り組みとしては、1996年、リユースびんの規格を統一してリユースをすすめ、1998年からは「トレー to トレー」、1999年にはたまごのモウルドパックのリサイクル、2003年からは牛乳容器をびんに変更、2010年には「袋 to 袋」に取り組んでいる。また、飲料用のペットボトルは使用せず、商品の包材にプラスチックはできるだけ使用しない総量規制も行っている。

【容器包装別費用負担額】

リサイクルのための収集・選別の費用は税金で負担されています。容器包装別に見ると下表のような金額になります。

容器	g/本	【税金】	
		市区町村の収集選別保管費用	(円)
PETボトル500ml	26		4.5
ガラスびん(無色)500ml	195		10.5
アルミ缶500ml	15		1.7
スチール缶500ml	43		4.3
その他プラスチック(マヨネーズ)	18		1.9

市区町村の収集費用はびん再使用ネットワーク廃棄物会計調査報告書2002事業年度版より計算
出典：容器包装の3Rを進める全国ネットワークのパンフレットより

グリーンコープは環境問題に取り組むため、2000年には「環境政策」を策定、4 R（リフューズ・リデュース・リユース・リサイクル）運動をすすめてきました。

2010年11月には、容器包装リサイクル法（以下、容リ法）の見直しとリデュース・リユース（2 R）の促進に関する署名運動に取り組みました。2011年3月1日、衆・参議院の議員会館を訪れ、集まった89,444筆の署名を国に請願するため、紹介議員に手渡しました。

また、同日午後には、グリーンコープもメンバーであるびん再使用ネットワーク主催で「容リ法見直しと2 R 促進の検討会議」が開催され、約130人（グリーンコープからは組合員他9人）が参加。国会議員や省庁からの参加もあり、活気のある会議となりました。

容リ法見直しと2 R 促進の検討会議報告

多大なリサイクル費用

検討会議は中村秀次さん（びん再使用ネットワーク代表幹事）の次の挨拶でスタート。「びん再使用ネットワークの5生協で約230万人の組合員。リユースびん（以下Rびん）の回収は年間1000万本になる。容リ法が施行されて13年、埋め立てごみは3分の1以下になってきた。しかし、ごみの量そのものは2000年をピークに高止まりし一向に減らない。大量のごみを大量にリサイクルしているのが現状で、そのための費用として全国で3000億円以上の税金が使われている。昨秋は、こうした状況を改善するために『拡大生産者責任』等を求めた

「容リ法を改正し、発生抑制と再使用を促進するための仕組みの検討を求める請願」の署名活動にも取り組んだ。びん再使用ネットワーク全体で現時点32万筆集まっている」。

検討会議には短時間ではあるが、この取り組みに賛同している国会議員の参加も10人近くあり、「請願にそった内容で何とか採択していきたいと思っている」とそれぞれから挨拶があった。

また、びん再使用ネットワークの5生協の代表からも発言があった。グリーンコープ生協ふくおか理事長田原幸子さんは、「エリア内の政令都市である北九州市と福岡市で、それぞれのごみの3 R（リデュース・リ

容リ法改正時期を見据えて

森下哲さん（環境省廃棄物・リサイクル対策部リサイクル推進室室長）

環境省は①循環型社会を構築していくこと②低炭素化社会をつくっていくこと③生物多様性を含めた自然

減り続けるRびん

吉川康彦さん（全国びん商

共社会をつくっていくことという3つの方針を打ち出している。①については2 R をすすめることが大切。それをいかに具体的に組みむかが課題。容リ法は2013年4月が改正年度、それをめざして、議論をすすめたい。

岡田俊郎さん（経済産業省産業技術環境局リサイクル推進課長）

2 R をどうできるのかが、容リ法の見直しの論点だ。ドイツは2003年から強制デポジットに取り組んでいるが、Rびんの比率は落ちてきており、強制法だけで世の中を変えられるかはある。自治体や酒造メーカーなどと一体となって、解決策に知恵をしばつていき

まだまだ、削減の余地がある容器や包材

山川肇さん（京都府立大学准教授）

容器包装は細々としたもので、たいした量ではないように思えるが、家庭ごみの約6割が容器包装。これ以上軽減は無理というメーカーもあるが、まだまだできることはある。例えば紅茶のティーバッグの個包装をなくすと7割、

肉のトレーをなくすと6、7割、カレーの箱をなくすと7割とそれぞれに容器包装を削減できる。こういったことをもつとすすめていくべき。そのためには収集、選別段階までかかる費用について、その商品を作った企業の負担を増やすことが大事。この動機付けがあると企業も負担額を減らすために自治体や市民と協力し、容器や包装を簡略化するはずだ。

最後に意見交換が行われた。国会では、請願があまり取り上げられないことへの指摘に、議員からは「慣例としてそういう状況だが、採択に向けて努力する」という応答があった。また、「2 R をすすめるために、取り組んでいる団体の情報交換を深めたい」など、意見や質問も積極的に出され、充実した3時間となった。

※リサイクル費用の85%を占める税負担をなくし、100%を事業者が負担して製品の価格に内部化。それを購入する消費者が100%のリサイクル費を負担するという考え方

リデュース・リユース優先の

循環型社会をめざして

連合会長

一升びん、ビールびんを洗って、リユースしている。しかしRびんの利用は激減している。国内で流通しているRびんは約35億本、ワンウェイは推定約750億本。Rびんはびん容器全体の4%にすぎない。取引先の酒造メーカーなどは新商品の商品設計の際にワンウェイを前提としているのが現状。どんどんRびんは減ってきている。メーカーはリサイクルに税金が使われていることなどには無関心だ。しかもガラス容器は製造に多量のエネルギーを使うもの。1回しか使わないのはもったいない。

自然の力を生かした土づくりが、元気でおいしい野菜をつくる



うちの生産者

107

長崎県南島原市
なんこう
南高有機農法
研究会

うちのメーカー

長崎県島原半島南端の海からほど近い山あいには、南高有機農法研究会（以下、南有研）はある。5戸の生産者が、バレイショと玉ねぎを中心に、多くの野菜を栽培している。発足から40年あまり、グリーンコープとは前身生協のころからのつきあいで、グリーンコープの食の安心・安全に関する理念を共有する同志のような存在だ。

代表の荒木隆太郎さんと、山田始さん、竹下浩二さん、林田千春さんに、農薬を使用しない、精魂込めたバレイショ・玉ねぎ栽培への思いを聞いた。



遠くに天草を望む島原半島南端の沿岸までバレイショ畑が広がる。栽培地に高低差があることで、長期間にわたり出荷が可能になる



青々とした葉を茂らせるバレイショ

ヨとも出荷最盛期。夜明けから日没過ぎまで、毎日休みなしで作業が続く。「野菜が良くできたら、苦勞も吹き飛ぶ。自分たちが食べたいとも思いますが、まずグリーンコープの組合員さんに美味しいものを食べてもらいたい。かわいい娘を嫁に出すような気持ちで出荷します」と林田さんは笑う。

元氣な農業で
元氣な地域を

南有研の生産者5戸には、すべて後継者がいる。現在親子二世代が専業で農業を営んでいる。後継者不足に悩む日本の農業の中にあつて稀有な存在だ。山田さん、竹下さん、林田さん夫妻も若い世代だ。山田さんも竹下さんも、高校卒業と同時に農業に従事。他の職業につくことは考えられなかつた。親世代の働く姿を見て育ち、農業を継ぐことは彼らにとってごく自然なことだったという。

「若い者たちはよくやってくれ5月は玉ねぎ、バレイショの芽が出る頃、霜対策のシートに穴を開け、芽が伸びやすいようにする（芽あけ。時期の見極めが難しい。芽あけ後に霜が降りると、せっかく出たバレイショの芽が枯れ、新しい芽が出るのを待たなければならぬ。芽あけ前に気温が上がるとシート内の温度が上がリ、芽が焼けてしまう。こうなると、種芋までだめになってしまう。1年により気候は違う。自然の力はどうしようもない。その分を見越して多めに作るしかない」と荒木さんは言う。

「土のエネルギーを吸収して葉も茎も強いから、害虫もあまり来ません」とは竹下さん。排水を良くするために畑の底の堅い層を砕く（深耕）など、良い土にするための苦勞は厭わない。「40年以上、年2回バレイショを同じ場所で作り続けているが、連作障害は一度も出ていません」。荒木さんは長年力を尽くしてきた土づくりに、ゆるぎない自信を覗かせる。



左から、山田始さん、代表の荒木隆太郎さん、竹下浩二さん

化学に頼らない農業を
南有研が発足したのは1970年。その頃、農業は農薬と化学肥料を大量に使うのが当たり前という時代。荒木さんたちは当時みかんを栽培していたが、頭上になるみかんに農薬を散布する作業は、相当に辛いものだった。当時の日本は化学によって成長した時代。しかし化学肥料で土が疲弊し、連作障害も出てきた。土壌殺菌剤は土を肥やす良い菌まで殺してしまう。農薬で身体も悪くしてしまう。化学に頼る農業は今後だめになると思いました」と荒木

さんは語る。「農薬を使わない農業をやりたい」。そんな思いを同じくする近郊の青年が10人ほど集まり、農協から独立して出荷組合を作った。それと同時にグリーンコープの前身生協との取り引きがはじまり、当時の地名「南高来郡」から字をとって会の名とした。

野菜（へい）は（へい）
農薬や化学肥料に頼らない野菜栽培は、土壌が要となる。荒木さんは「野菜づくりは土づくり」と言う。南有研では、B・M・W技術を普及しはじめた当初から積極的に土づくりに生かしてきた。グリーンコープの産直生産者から取り寄せた鶏糞堆肥と生物活性水で独自の堆肥を作り、土に鋤き込む。バクテリアの働きで、保水性に富みしかも通気性、排水性も良い、植物にとって好条件の土ができる。「だから干ばつや大雨にも強い。気候に左右されにくく丈夫に育ちます」と山田さん。「土のエネルギーを吸収して葉も茎も強いから、害虫もあまり来ません」とは竹下さん。排水を良くするために畑の底の堅い層を砕く（深耕）など、良い土にするための苦勞は厭わない。「40年以上、年2回バレイショを同じ場所で作り続けているが、連作障害は一度も出ていません」。荒木さんは長年力を尽くしてきた土づくりに、ゆるぎない自信を覗かせる。

収穫で苦勞も吹き飛ぶ
丈夫に育つとはいえ、春



収穫を待つばかりのみずみずしい玉ねぎ

バレイショとたまねぎの栽培計画

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
バレイショ	出島	秋作	貯蔵出荷						播種			栽培		収穫出荷	
		春作	播種		栽培		収穫出荷		貯蔵出荷						
	メーク		播種		栽培		収穫出荷								
玉ねぎ	早作		栽培			収穫出荷			播種		定植				
	普通作		栽培			収穫出荷		貯蔵出荷			播種		定植		

※その年の天候により時期がずれる場合があります。

※自然の浄化作用をモデルに「バクテリア（B）の働きで、ミネラル（M）バランスに優れたウオーター（W）を作り出す技術

ファイバーリサイクル事業パキスタン視察報告

私たちが届けた古着
子どもたちの教育

アルカイルアカデミーの子どもたちと。前列左2人目から、行岡さん、田中さん、田原さん

ファイバーリサイクルの取り組みは
ムザヒルさんの思いに連帯すること

グリーンコープ共同代表理事 田中裕子さん

2010年秋からグリーンコープが本格的な取り組みをはじめたファイバーリサイクル事業の契機となったパキスタンの子どもたちへの支援。その実状を知るために、2011年2月パキスタンを訪れました。

スラム街やごみ捨て場にある学校、アルカイルアカデミーでは、想像以上に過酷な状況の中で子どもたちは学んでいました。汚水が流れ込む校庭やハエの群がる教室、机も椅子もない中で子どもたちは熱心に目を輝かせて勉強しています。児童労働が当たり前のパキスタンでは半日だけでも学校に通えるのはまだ幸せな子どもたちかもしれません。叶えることはとても困難に思える将来の夢を、それでも目を輝かせて話してくれた少女もいました。

25年前にスラム街に住む

10人の子どものために教育をという思いで学校を作られた校長のムザヒルさんは、教育の目的は子どもが仕事をしなければならぬ状況の中で自分自身を見出し、作り出していくこと。そして教育の成果は子どもたちがどんな人生を生きていくのか、どんな風に考えていくのかを選び取る力だと言われたことがとても心に残りました。

グリーンコープがすすめるファイバーリサイクルの取り組みは、ムザヒルさんのこの思いに連帯していくことだと感じました。パキスタンの過酷な現実、子どもたちの笑顔、ムザヒルさんの熱い思いとその思いを支えるたくさんの人たちとの出会いは私の心に深く刻まれ生涯忘れることのない視察になりました。



アルカイルアカデミー



アルカイルアカデミーでの学び

いとムザヒルさんは願う。親たちのしてきたことは違う解決方法を子どもたちが自分の将来のために選び取っていくことはとても重要だとムザヒルさんは考えている。

スラム地区の子どもたちのための学校はスラムのど真ん中にある。生徒たちは4〜5歳くらいの1年生から10年生まで。最低学年の幼い子どもたちが、ちびた鉛筆を握り締め、おしゃべりもせずに数の数え方を学んでいる。この子どもたちは以前は子守をしていた姉や兄の側について来ていた。今は姉や兄の学びの邪魔にならないよう、独立した最低学年で受け入れている。

学年が上がるごとに文字の書き方、宗教学や英語による化学の授業などもあり、生徒たちは熱心に集中していた。10年生の子どもたちは5月のマトリック（大学受験資格認定試験）に備えてテスト中で教室内は緊張感がみなぎっていた。子ども

と意識を広げる意味もある。学校には無料の診療所もある。少なくとも毎日30人以上の人を診察し薬も出している。マラリアや風邪、今年はインフルエンザも多い。風邪のシーズンには50〜60人の診察をする。学校で学ぶ子どもたち以外にスラム地区の住人たちの診察もしている。時には訪問診療もする。医者はとても忙しい。

学校の授業料は無料で、ノート、教材費などは学校で準備する。貧しい子どもたちには食事も提供する。認定試験前で午前・午後と連続して学ぶ子や、家に帰ってもご飯のない子（4〜5人に1人）のために台所では200食の昼食を準備している。生活に困窮し、子どもたちを働かせたい親たちのためには食料（穀物）を支給し、その分子どもたちが学ぶチャンスを持てるようにもしてきた。学校はスラム地区になくてはならない存在になっている。

教育が社会変革につながると思えないが、学校が社会化し広がることで、社

長い年月、過酷な状況の中でひたすらに誠実で静かな闘いを続けてきたムザヒルさんによってパキスタンの子どもたちや大人たちが根本から救われる日がきつと来るのだらうと思う。

その生き方や考え方を現地で直接聞くことができたのはとてもありがたかった。訥々と語るムザヒルさんの話とJFSA 西村さんの通訳によって、私たちが聞き取れたことを伝えたい。

その延長線上に私たちの地域での取り組みもつながっているのだと思う。

ムザヒルさんやその支援者のアルカイルビジネススクールの皆さんは、日本での私たちの取り組みをとっても喜んでくれた。ホームレス者の自立支援のための職場としてファイバーリサイクルの仕事が機能し、古着市というリサイクルに参加していく仕組みは、単にパキスタンの子どもたちを支援するだけでなく、お互いの地域の必要性に支えられている。お互いを支えあう関係として、これからも育てていきたい。

劣悪な環境の中、どの子ども
真剣なまなざしで学んでいました

グリーンコープ生協ふくおか理事長 田原幸子さん

驕然としたスラム地区の学校で熱心に学んでいる子どもたちと出会ってきました。10年生の女の子は「医者になって地域のために貢献したい」と目を輝かせていました。8年生の男の子は「楽しく勉強している。早く働いて親を助きたい」と、はにかみながら話してくれました。子どもたちは自分の家族状況と向きあい、あきらめないで将来を見つめていてたくましいと感じました。カラチクンディの分校の子どもたちとの出会いは衝撃的でした。ごみ焼却の煙が覆い、大量のハ

エが飛び交う劣悪な環境の中、どの子どもも真剣なまなざしで学んでいました。6年生の男の子は「ごみの中からよい物が見つかった時すごくうれしい」とうつぶいて話しました。パキスタンの子どもたちの置かれているどうしようもない現実に胸が詰まる思いでした。校長のムザヒルさんは子どもたちが自分の環境の中、自分で判断し選択する力を持たせたいと考えられています。私はその思いに感銘し、これまで積み上げてこられたことを支援していきたいと思いました。



グリーンコープ生協
くまもと

地域組合員総会で試食しました

くまもとでは「お米と野菜を食べよう」を実践するために地域組合員総会で「産直きゅうり」「産直人参」を統一サンプルとして試食してもらい、利用普及を図ることにしました。

2011年度京北地区

地域組合員総会

統一サンプル「産直きゅうり」「産直人参」を、地区委員さん手作りの一夜漬けで産直米ご飯と一緒に試食しました。産直豚のお出汁たつぷりの豚汁にも産直人参をはじめゴボウ・大根・パレイシヨなどおいしい根菜類がたっぷり。箸が立ちそうなくらい具だくさんでした。グリーンコープの味噌・調味料でおいしさに満足。委員長の山下まいさんから提案され、承認されたばかりの京北地区活動方針「いのちを育む食への運動を推進します。お米と野菜の利用普及に取り組みます」を早速、参加者みんなで楽しく、おいしく取り組みることができました。

県央東地域本部京北地区
國本聡子



グリーンコープ生協
おおさか

春の組合員のつどいで生産者と交流しました

組合員のつどいで青果生産者の会の板垣浩二さん(かきのきむら)と牛尾光寿さん(金武友愛会)を囲んで話を聞く

おおさかのエリアにはグリーンコープの米や野菜の生産地がないため、直接産地を訪れての組合員の産地交流会はなかなかできません。そこで、2011年度の各地域で行われた春の組合員のつどいでは、中国地方や九州の米や野菜の生産者を招いて組合員との交流を行いました。参加した組合員からは「とてもおいしかったです。野菜の甘みに驚きました」「野菜への愛情たつぷりの話を聞いて、もっとグリーンコープの野菜を買いたいと思いました」「直接話が聞けるのは貴重です。野菜に付いている土が苦手でしたが、その土が大切だということが分かりました」などの感想が聞かれました。

お米と野菜の利用普及の取り組みや、組合員・職員と生産者との交流がすすんでいます

2011年度のグリーンコープの重点方針の一つ「お米と野菜を食べて、安心・安全な食べものと日本の農業を守り、健康に生活していきましょう!」の取り組みがすすんでいます。

今号ではグリーンコープ生協おおさかの組合員と生産者の交流、グリーンコープ生協くまもとの地域組合員総会での取り組み、グリーンコープ生協ひろしまの職員による産地研修のようすを紹介します。

お米と野菜を食べよう!

-2-



グリーンコープ生協
ひろしま



人参の収穫

抜きたての人参うまそう



デカイ

カントリーエレベーターの見学

袋詰めは引がかかって慣れるまでは大変



ねぎの選別・袋詰め作業

苗が枯れないことを祈って!



ねぎの鉢替え作業

職員の産地研修に組み込んでいきます

ひろしまでは「お米と野菜を食べよう!」の取り組みを推進していくために、職員の産地研修を行っています。職員が福岡県の産地を訪れ、見学や農作業の体験をしました。

米の貯蔵庫である糸島農協営農総合センター・カントリーエレベーターの見学では「大きな工場のようにびっくりです。管理・選別はコンピューターが使用されており、とても厳密に管理されていることに感動しました」と感想がありました。産直青果生産者グループ「糸島BM農法研究会」では白ねぎの袋詰めや苗の植え付け、人参やブロッコリーの収穫・袋詰めなどの農業体験をしました。「減農薬・無農薬で農業を続けていくのは根気、手間、気配りが必要だと感じました。そういった商品を、自信を持って組合員さんに利用してもらい、そこからさらに減農薬・無農薬の農業が広がっていくといいと思います」「農業を仕事として成立させるのは生易しいものではないと実感しました。これからは、今回の体験を生かし『もの』ではなく『生命』をつなぐ食べもの」として組合員さんに語っていきたいと思います」などの感想が出されました。

南と北をつなぐ食べもの エコシユリンプ

グリーンコープでは、1992年からインドネシアからの民衆交易品・エコシユリンプを取り扱っています。2月21日、現地ATINA社の工場でエコシユリンプの加工に携わっている3人が来日し、福岡市で学習会と組合員との交流を行いました。



調査した内容も報告されました。

1日7時間労働を基本に、繁忙期は交代制で仕事をします。時給制の多い現地では珍しい月給制です。昼食は弁当が用意され、寒い加

が病気を発生させ、薬剤を投入してそれを防ぐというくり返しは、土壌が汚れてしまった池の放置など、新たな環境問題を引き起こしました。

そのような中、3000年

グリーンコープが掲げる4つの共生の一つ「南と北の共生」は、約20年前にはじめたネグロスバナナの民衆交易から形あるものとなり、連帯を深めながら、さまざまな国へと広がっています。エコシユリンプの取り組みもその一つです。グリーンコープ共同体代表理事の田中裕子さんは、学習会の冒頭「3人の方の話から、どんな人たちがどんな思いで仕事に携わっているか、そこからエコシユリンプがどんなエビなのかを実感してほしい」と開催の趣旨を述べました。

学習会では、エビをめぐる状況について、ATJより話がありました。1960年、日本でエビの輸入が自由化され、東南アジアでのエビの生産量は一気に増えました。そこで行われたトロール(定置網)漁は海底を荒らし、海洋資源を枯渇させ、環境と生態系に大きな影響を与えました。その後、効率重視のエビの集約型養殖がはじまりました。狭い池での密飼い

エコシユリンプの向いにつにみえるもの
今回来日した3人はATINA社での日本訪問の公募企画に自ら応募しました。

組合員からは、質問や応答、感想などもたくさん出されました。

エコシユリンプに関わる人たちは

次に、ATINA社の労働者の生活を通してエコシユリンプを知るといふ目的で、第三者機関であるAPLAが専門の研究者に依頼して



APLA

(オルタナティブ・ピープルズ・リンケイジ・イン・アジア)
日本を含むアジア各地で農業・漁業を軸に「地域自立」をめざす人々との出会いを作り、経験を分かちあい、協働する場を作り出すことを目的に活動する特定非営利法人

ATINA社

(オルター・トレード・インドネシア)
エコシユリンプの輸出・加工を行う。エコシユリンプの産地における社会活動をめざす

ATJ

(オルター・トレード・ジャパン)
バナナやエビの取引を通じて、「オルタナティブ」な社会のしくみや関係を作り出そうと、生協や産直団体・市民団体により設立

島根県の産直たまご生産者へ

鳥インフルエンザ義援金(カンパ)を届けました

グリーンコープ各単協からの義援金(カンパ) 総額 5,300,100円



産直たまご生産者に義援金を手渡しました

3月30日、島根県の産直たまご生産者の事務所にて鳥インフルエンザ義援金贈呈式が行われました。共同体代表理事田中裕子さんより「すべての鶏を処分するという辛い選択をし、頑張っておられる生産者の、少しでも助けになればという組合員の思いを届けにきました」と挨拶し、義援金を手渡しました。またグリーンコープ生協(島根)、グリーンコープ生協くまもとの店舗、グリーンクラブ中国支部、大石産業(株)からの義援金もそれぞれから手渡されました。生産者は「組合員さんの思いに応えるためにも、一日も早い養鶏場の再建とたまごの出荷をめざしていきます」と力強い言葉で応えました。

チェルノブイリ支援募金にご協力ありがとうございました

・参加した組合員数 839人
・募金総額 2,757,000円

募金は「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」をとおして、被災者支援のために役立てられます。主には日本の医療専門家を含めた検診団の派遣費用や医療機器などの購入に使われます。被災者の苦しみは今なお続いており、まだまだ支援が必要です。グリーンコープはこれからも支援していきます。

投稿募集中

わが家のエコ

私の好きなグリーンコープ商品

4000字程度

毎月末

住所氏名年齢TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX・Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(5000円分)進呈。

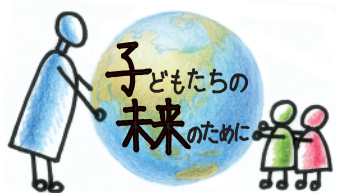
住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561 福岡市博多区博多駅前1丁目5-1

グリーンコープコミュニケーション・サービス連(R・E・N)「共生の時代」編集部 宛

FAX 092-48117876

Eメールアドレス: ftkoho@greencoop.or.jp



No.33

原発の輸出

今、アジアでは原子力発電の新規導入を考える国が増えています。しかし、原発のノウハウの蓄積のない新規導入国の安全対策には不安もあります。そんな中、日本は、「最先端技術や廃棄物処理などにも協力する」とし、原発の海外への売り込みを強化しています。

一方欧米の原発では、トラブル続発とコスト増などの影響で新設の動きが難航しています。日本国内でもさまざまなトラブルや放射性廃棄物の処理など多くの問題を抱えています。このような状態で、日本は新規導入国の人々に対し責任を負えるのでしょうか。

私たちはすべての人々の「生命・暮らし」を守るため、原発に頼らない社会をめざしたいと思います。

参考記事：朝日新聞 2011年1月 7日「ルネサンス」に黄信号
毎日新聞 2011年1月10日 技術者育成も支援

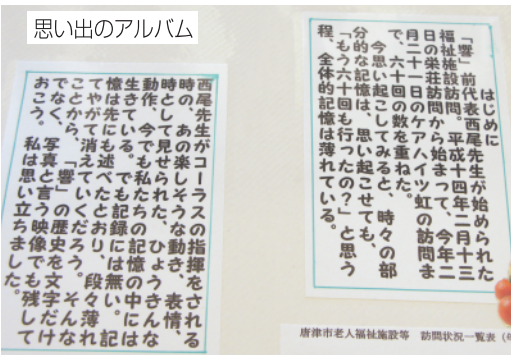
グリーンコープ共同体組織委員会



前列左から松尾さん、代表の江副さん、山口さん
後列左から青木さん、吉田さん、日高さん、野口さん



「まつら」の演奏。中央ギター奏者は「衣干エコース」の指揮者、川原さん



「響」は昨年グリーンコープの福祉活動組合員基金の助成を受けた。助成金でアンプやマイクを購入した際、アンプの繋ぎ方がうまくいかず、たまたま練習会場にいた江副さんの卓球仲間、松尾さんに助っ人を頼んだ。ギターも弾けるといいうのでそのまま仲間になった。数カ月のニューフェイスだがギターの伴奏と歌声は

「響」は昨年グリーンコープの福祉活動組合員基金の助成を受けた。助成金でアンプやマイクを購入した際、アンプの繋ぎ方がうまくいかず、たまたま練習会場にいた江副さんの卓球仲間、松尾さんに助っ人を頼んだ。ギターも弾けるといいうのでそのまま仲間になった。数カ月のニューフェイスだがギターの伴奏と歌声は

「炭坑節」の演奏に移った時、やおら80歳最年長の山口さんがハーモニカを置いて踊り出した。慰問先ではまず先頭を切ったメンバーが踊りはじめるのが慣

山口さんの思いは「響」全員の思いだ。音が共鳴するように思いも共鳴し、「響」のやわらかな響きは絶えることを知らない。

佐賀県の北西に位置する唐津市。玄界灘を臨み歴史浪漫にあふれた街で、ボランティアグループ響（以下「響」）は年間30回近く、福祉施設・宅老所への活発な慰問活動を展開しています。「響」は、コーラスグループ「衣干エコース」と、「まつらハーモニカサークル」の2グループで構成され、それぞれに練習を重ね、慰問には合同で出かけます。

活動のようすを「響」代表の江副文子さんとハーモニカサークルの方々に聞きました。※衣干エコースにはグリーンコープ生協さの組合員が2人在籍。

ひびき 響 ボランティアグループ 衣干エコース まつらハーモニカサークル

「響」が結成されて10年。慰問回数は通算110回を超えた。コーラスの温かなハーモニート、哀愁をおびたハーモニカの響きは行く先々で好評。慰問先も回数も年ごとに増えている。「響」の源流を辿れば30年ほど前、小学校PTAのママさんコーラス「衣干エコース」（以下「衣干」）にさかのぼる。生みの親である小学校教諭の故西尾傳枝さんが情熱を傾け、守り育てたサークルだ。「ハーモニカもいいよ」という西尾さんの一言で、遅れて「まつらハーモニカサークル」（以下「まつら」）も発足する。自分たちが楽しむだけでなく、老人福祉施設に慰問に行くことも西尾さんの発

「まつら」メンバーはハーモニカ7人、ギター2人。練習日、時間になると三々五々メンバーは集まってくる。入会の動機はさまざま。野口さんは西尾さんのかつての同僚。教師を辞めた。音楽に惹かれて集った

「まつら」メンバーはハーモニカ7人、ギター2人。練習日、時間になると三々五々メンバーは集まってくる。入会の動機はさまざま。野口さんは西尾さんのかつての同僚。教師を辞めた。音楽に惹かれて集った

「響」は昨年グリーンコープの福祉活動組合員基金の助成を受けた。助成金でアンプやマイクを購入した際、アンプの繋ぎ方がうまくいかず、たまたま練習会場にいた江副さんの卓球仲間、松尾さんに助っ人を頼んだ。ギターも弾けるといいうのでそのまま仲間になった。数カ月のニューフェイスだがギターの伴奏と歌声は

「響」は昨年グリーンコープの福祉活動組合員基金の助成を受けた。助成金でアンプやマイクを購入した際、アンプの繋ぎ方がうまくいかず、たまたま練習会場にいた江副さんの卓球仲間、松尾さんに助っ人を頼んだ。ギターも弾けるといいうのでそのまま仲間になった。数カ月のニューフェイスだがギターの伴奏と歌声は

「響」は昨年グリーンコープの福祉活動組合員基金の助成を受けた。助成金でアンプやマイクを購入した際、アンプの繋ぎ方がうまくいかず、たまたま練習会場にいた江副さんの卓球仲間、松尾さんに助っ人を頼んだ。ギターも弾けるといいうのでそのまま仲間になった。数カ月のニューフェイスだがギターの伴奏と歌声は

いま地域を考える

No.212

人が好きで 音楽が好きで

聴く人びとと響きあいたい

案だった。西尾さん亡き後もメンバーはその遺志を受け継ぎ、「響」を立ちあげた。名前は「慰問先の方々と響きあいたい」と願って付けた。

コーラスの会員は19人。指揮者の川原さんは自宅から1時間車を走らせてコーラスとハーモニカの練習に駆けつける。ピアノ伴奏の岩田さんは子連れで参加。メンバーで子守を交代しながらの練習となる。車を持たない人には送迎をかって出るというメンバー同士の助けあいの中から「衣干」のやさしい歌声は生まれていく。



聴衆を魅了する「衣干エコース」のコーラス

2011年3月の組合員数 394983人 (3/20現在)

リユースリサイクルデータ 2011年2月分 回収本数 177,980本 回収率 67.1%	牛乳びん 回収本数 749,601本 回収率 102.2% (1月16日～2月12日回収分)	フードマイレージ 2011年3月までに組合員の利用によってたまったのは 93,635,215.5 poco CO ₂ に換算して9,363トンを削減したことになりました
リユースびん 回収本数 177,980本 回収率 67.1%	トレー 回収重量 10,362kg 回収率 46.4%	アジア民衆基金 2011年3月までに組合員の利用によってたまったのは 15,109,974円
モウルドパック 回収重量 29,570kg 回収率 97.5%	仕分け袋 回収重量 1,152.0kg 回収率 7.4%	

放射能汚染測定結果報告(209)

2011年2月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品

	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計 ベクレル/kg
※	大豆	九州	ND	ND	ND
※	大豆	北海道	ND	ND	ND
※	小豆	北海道	ND	ND	ND
※	ウスターソース		ND	ND	ND
※	マスコパド糖	フィリピン	ND	ND	ND
※	きび砂糖	鹿児島県	ND	ND	ND

お詫び
4月号5面の右下の「日本のGMOフリーゾーンの登録状況」の囲み記事が不十分な記載となっており、また、「沖縄からは久米島が初登録」という記述があるにもかかわらず、久米島を含む沖縄県の地図の掲載が漏れておりました。お詫びいたします。